芥川賞全集

第三卷

文藝春秋

芥川賞全集　第三巻

著者
櫻田常久
多田裕計
芝木好子
倉光俊夫
石塚喜久三
東野邊薫
八木義徳
小尾十三
清水基吉

昭和五十七年四月二十五日　第一刷

定価　一八〇〇円

発行者　杉村友一

発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話（〇三）二六五―一二一一

本文印刷　理想社印刷所
付物印刷　凸版印刷
製本所　中島製本
製函所　加藤製函

万一、落丁乱丁の場合は
お取替え致します

Printed in Japan

目次

平賀源内　櫻田常久　5
長江デルタ　多田裕計　41
青果の市　芝木好子　81
連絡員　倉光俊夫　115
纏足の頃　石塚喜久三　159
和紙　東野邊薫　187
劉廣福　八木義德　227
登攀　小尾十三　251
雁立　清水基吉　309
選評　333
受賞者のことば　403
年譜　409

题　装
字　丁

中　粟
田　屋

功　充

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

芥川賞全集　第三巻

平賀源内

櫻田常久

（第十二回　昭和十五年下半期）

「平賀源内」（昭和四十六年十二月発行、東邦出版社刊）を底本とした。

一

「口外かたく無用。この旨、しかと田沼にご誓言くださるか？」

火鉢に両手をかざし、痛々しいまでに痩せた背を曲げた老中田沼主殿頭意次は、その鋭い眼を玄白の頭上にそそいで、相手のいささかの心の動揺をも見逃すまいと身構えた。その眼の異様な光に射すくめられたかのように、玄白は骨格の逞しい身体を平伏させた。彼がおもむろに坊主頭をあげたとたん、二人の視線は執拗にからみあった。

「玄白、死すとも口外つかまつりませぬ」

玄白は、意次のあくまで蒼い顔を見つめたまま、こう言いきると、その大きな口をかたくとじた。

意次の眼の光は、しだいに和らいだ。

「万事、ご一任いたそう」

脳天から絞りだすような、意次の声が急に低く、おだやかになって、

「あれをこのまま獄死させるのも、惜しいでのう」

それは意次が、自分の冷い心に強いて一脈の暖かみを、吹きこもうとして、自分自身にいいきかせている言葉のようにもきかれた。しかし、玄白は、意次のこの一言によって、自分の友人が救われるかと思うと、何か生暖かいものが、鼻腔へ流れこむのを感じた。

老いが近づくにつれて、焦燥と沈鬱にとりつかれ、近来とみに癇癖が昂ぶっていた源内は、門弟たちとの間に誤解の種が断えなかった。

安永八年霜月二十日。

平生たしなまぬ酒に酔った源内は、門弟の一人、吉兵衛に秘密を盗まれたと思いこみ、昂ぶった感情のままに一刀をあびせかけた。吉兵衛を殺そうなどとは毛頭考えてはいなかった。かっと逆上した彼は、いわば彼自身とはまったく別の魂に支配されていた。一人の門弟を殺した、という事実のまえに、彼はむしろ茫然としていた。

小半時ばかりたって、ようやく我にかえった源内は、塾頭森島忠良を呼びよせ、浜町の杉田玄白宅へ委細を報告させた。

「お前の見たままを申しあげるのだぞ。わしをかばおうとして潤色してはならん」

忠良は浜町へ駈けつけたが、この時、玄白は患家の請いに応じ武州忍にでかけているとのことで、折悪しく、留守であった。源内は門弟らが眼を離した瞬間をうかがい、腹を切ろうとしたが、わずかに下腹を傷つけたばかりで、ふたたび門弟らにとどめられ、翌、早朝、伝馬町の揚屋に投ぜられたのである。

杉田玄白、中川淳庵、桂川甫周、平秩東作（立松東蒙）、太田蜀山人などの友人は、あらゆる手段を講じ、源内年来の庇護者たる田沼侯にすがり、源内の救命を嘆願しようとした。実測究理の学の曙を照らす一奇才、源内のご助命を乞いたてまつったのである。老中、田沼意次はその公用人、三浦庄二を通じて、つぎのように言わせた。

「市井一浪人の殺害事件が老中の所管にあらざることは、おのおの方も、とくとご承知のはず……」

玄白は台閣の最大権威者としての田沼侯が、市井のわざくれ浪人平賀源内とのひそかな関係を世間に知られまいとする心情を推察したので、その他の庇護者たる仙台侯、佐竹侯、館林侯のほか、源内の旧主たる高松侯にもすがり、また蜀山人を通じて町奉行をうごかそうとした。

「定法は曲げられませぬ」

と言うのが、その人たちの共通の挨拶である。玄白には、もはや、ほどこすべき術は考えられなかったが、自分のみを唯一のたよりとしている獄中の源内を思うと、このまま引きさがって、友情の期待を裏切ることはできなかった。友人らは源内のために、せめても罪の軽きこと、能うべくんば軽追放以下の処罰を心からねがっていたのである。

焦燥と諦めとの十五日ばかりがすぎた十二月五日の夜、一人の侍が浜町の玄白宅をおとずれ、「ごく内々の負傷人ゆえ、ひそかに木挽町邸へご来駕」との旨を申しいれた。玄白は、飽くまで冷やかな意次の心の底に潜む、暖かい生血に触れたかのような気がした。しかし、玄白は、源内が獄中で危篤におちいったとの噂を思いだすと、源内の銀白総髪をいただいた顔が、不吉な死人の顔となって、眼の前に、ただようのだった。彼は、侍がやとってくれた辻駕籠にのって、木挽町の唐木御殿へむかった。

「余人を交えず、二人きり秘かに談じあわねばならぬおり、戯作者風情のものまでお使いなさるは、ご年齢に似合わぬ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ご浅慮……」

老中、田沼意次は、せきこみながら、きれぎれに、その金属性の声で玄白の頭上に鋭い皮肉をあびせた。意次のこめかみのあたりは連続的に痙攣していた。意次は人払いを命じて、何事かを玄白に命じたのである。

玄白が唐木御殿を辞するすこし前から、乾いた粉雪が静かに降りだした。彼は幾分か心のしこりがとけたかのように感じたが、いま主殿頭からおおせつかったことは、実行困難な重大使命である。しかも「余人に悟られぬよう」、「田沼の名の出ぬよう」に取計らうことは、ほとんど不可能にちかい。彼は今後とるべき手段を思いめぐらしながら、幾度も眼の前の粉雪を払いのけた。いかなる手段を用いても源内を救いださなければならない。このことは彼の友情の厳として命ずるところであるが、それにしても、彼を救いだすまで、その生命がもってくれるかどうかが、問題の中心であった。

揚屋に投げこまれた源内は、片隅に俯向いたまま、顔をあげようともしなかった。

裁く人の判断如何によっては、彼は重ければ遠島、軽くとも中追放に処せらるべき立場におかれていた。彼にとっては、処罰の軽重は問題ではなく、ここへ投げこまれたこと自体が、すでに大きな屈辱であり、この屈辱からのがれるみちは、死以外にはなかった。源内は三度の食事をこばみとおした。

この揚屋に繋がれている人々には、たがいに慰め、いたわりあうような気風は微塵もなく、いま投げこまれた男が、有名な平賀源内であることを知ると、彼を白眼視し、きこえよがしの蔭口をきいた。僧侶が「謀書謀判、それとも賄賂差出しか」と憎々しくささやいたのに応じて、御家人くずれの「火つけ、盗賊、人殺しはできめえ」と、つぶやく声がきこえた。

絶食数日におよんだ源内の脳裡に、五十二年の生涯中の断片が前後の脈絡もなく去来した。故郷高松における御薬園付き足軽として四人扶持銀十枚のみじめな生涯、母の顔、オランダ船の帆、秩父の山のたたずまい、エレキテルの箱に色ペンキで描いたオランダ唐草模様、彼の浄瑠璃『神霊矢口渡』を語る豊竹新太夫の姿、それらのものが瞼に見え、切腹し損じた自分を話題として、うち興ずる友人たちの声がきこえた。下獄後十日目ごろから、下腹の僅かばかりの傷が赤くただれ、熱をもち、呼吸もくるしくなったので、

源内は、片隅に両足を縮め、背を丸くして横たわったまま、遂には動けなくなった。十二月五日、彼の意識は次第に溷濁し、自分は何のためにここにいるのか、ここがどこなのかすら見分けがつかなくなったが、相変わらず頑強に三度の食事をこばんでいたので、時には牢番が、彼の口を割って、竹の筒で重湯を流しこむことさえあった。病気はあきらかに破傷風である。

源内は揚屋付属の養生部屋に移された。そこは薄暗い、一坪半の板の間で、その中央に、縁なし畳を一枚敷き、周囲は頑丈な角材の格子でとりかこみ、これと寸分違わぬ部屋が一列に四つならんでいる。その一ばん端の一室は物置に兼用され、そこには棺桶と形ばかりの葬具とが埃のなかに投げこまれてあった。物置の隣にならべられた棺桶の隙間から、かろうじて光のさしこむ養生部屋に移された源内は、全く意識をうしなっていたが、ここへ移されてからは、いままであれほど頑強に食事をこばんでいたのにもかかわらず、牢番のさしだす重湯の木匙をすすり、口許にあてがう蜜柑の汁を吸った。

夜遅く、亥の刻もすぎたころ、十徳姿に坊主頭、小柄ではあるが骨格のたくましい四十男が、片手で裸蠟燭を蔽うた牢番人に導かれて、足音を忍ばせながら、この養生部屋へちかづいてきた。牢番は「ここです」と言う言葉のかわりに、灯を少し前方へうごかした。十徳姿は、格子に顔をすりよせ、そこに花色木綿らしい薄い夜具のあるのを見た。体熱に暖められた膿汁のような臭気が鼻を刺した。彼等は錠前を静かにはずして中へはいり、枕もとに灯をさし向けた。銀白の総髪をみだし、頬から顎へまばらな髯を生やした、血のけのない源内の顔が、木枕のうえに軽々とのっかっていた。玄白は額に手をあてた。脈をみた。眼瞼をひらいた。

「平賀氏、平賀氏、玄白でござるぞ」

耳もとに口をあてがって、低い、しかし底力のある声でいった。病人の顔は表情の微動さえしめさなかった。玄白は病人の頭を揺すって、もう一度ささやいた。

「平賀氏！」

源内の細い眼が一瞬間見開かれたようにも思われた。玄白は夜着をとりのけ、胸から下腹へ、下腹から両足へと仔細に検診した。耳を直接に胸にあてて心音を聞き、また下腹の傷の周囲を撫で、指先でおしてもみた。絶望にちかい溜息が洩れた。この瞬間、玄白の頭のなかには、源内との過去二十年間の友情がいろいろの形象となってきらめいた。自分が『解体新書』の訳業を仕上げたとき、何よりもさき

に大和町の源内宅にかけつけて、「できたぞ！」と怒鳴ったこと、源内はそれを忘れなかったのか、それから三年後、源内のエレキテルが完成したときにも浜町の玄白宅へとびこんできて「杉田氏、できましたぞ」といって、そのまま街へひっ返していったことなぞが、当時の姿のまま眼の前にうかぶのであった。

「おやめなさるのか？」

闇のなかの牢番の低い声が玄白をおどろかせた。玄白は、それには返事をしないで、ふたたび耳を源内の胸にあてて、心音を聞き、小首をかしげた。玄白は甚しく動揺し、何事か重大決心のまえに逡巡しているらしかった。長い、仔細な検診がくりかえされ、玄白の眉はいよいよせまった。

「食い気はあるかのう？」

玄白の低い、圧えた声がたずねた。

「あれほど頑固に食事をこばんでおられたが、危篤に陥られてからは、口を尖らして重湯の匙をおすいになる。蜜柑の袋を口許へもっていくと、それもおすすりなさる」

さらに低い声が答えた。突然、大牢の方向から喘息の咳がたえだえにきこえた。

「このままでは明朝までもつまい。即刻！」と低くささやいた玄白は、厳然たる調子にかわって、

「用意のものを！」と命じた。

牢番の裸蠟燭を受けとった玄白は、源内の枕もとにつったっていた。が、その灯は左右に小刻みにゆれていた。小半時もたって、牢番は熱湯のはいった手桶、金だらい、薬箱、麻縄などをもってもどってきた。彼らは麻縄で源内の両足をしばり、その残りを畳の下にまわして、堅く畳にくくりつけた。胸の上にも麻縄を十文字にからめ、おなじく畳にしばりつけた。また龕燈を天井の格子にとりつけ、その光が病人の下腹をてらすように、いろいろ工夫をこらした。

「柔術の呼吸で上半身をおさえてくだされ、そう、もっと強く。声はだすまいが用心のため口をおさえていただきたい。そうそう、貴公の股のあいだにその頭をはさんで……」

玄白は、前と別人のようになって、きびしく命令した。友人源内の生命をとりもどそうとして、人間的に深くなやんでいた玄白は、この瞬間に、急に冷静な態度になった。かねがね実施をのぞんでいた切開法とバブルの刺絡術とを併用すべき絶好の機会である。用意がおわると、彼はサボーネ（石鹸）で両手をきよめ傷口の周囲の毛を剃り、強烈な臭いのする薬を下腹全体に塗って、病人の大腿部のうえ

に馬乗りになった。彼は極めて冷かに患部に刀をあてた。膿汁が彼の顔に跳ねかえったが、それを拭おうともしないで、巧みに患部をえぐりとった。これだけの力が病人のどこに潜んでいるのかと疑われるほどの力で、源内は抵抗した。すこしでも身動きされると、刀の切先きが腹膜を傷つける恐れがあるので、玄白も牢番も必死になっておさえていた。玄白は切開部の後始末をおわると、すぐ刺絡術の準備にとりかかった。かつてオランダ外科バブルが医生川原元伯の舌疽にほどこした、あの思い切った刺絡術を下腹部から大腿部へかけておこなったのである。血膿は二つの金だらいをみたした。彼はこの大手術をおわると、牢番の助けをかりて、堅くくいしばった源内の口をわり、桃色の水薬を二、三滴ながしこんだ。玄白は額に脂汗をにじませたまま、板の間にぐったり腰をおろし、格子の角柱にもたれ、後片付けをしようともしなかった。

玄白自身は、この手術の結果に対して全く自信をもてなかったのである。手術をおわって、実測究理の実践者玄白から次第に人間玄白にもどるにつれて、それがはたして最善の手段であったか、確信なくしてこの手術をおこなうことが友情に添うものか、といったような疑問が次ぎ次ぎにわいてきた。彼は、ひしひしせまる夜明け前の寒気を感じないかのように、東が白むまで枕もとにすわっていた。

玄白は、後始末を牢番にたのむと、ひとまず馬喰町の源内宅へおもむいた。朝霜をふみ、寒風に顔をなでられると、頭のしんにのこっていた睡気が吹きとばされ、昨夜の自分の行動に対しても明確な判断をくだすことができるようになっていた。すべては源内に対する友情を基調としておこなわれ、あの切開と刺絡とは目下の自分のなし得る最善の処置であったと。

馬喰町には塾頭森島忠良を始め、門弟の二一天作、花景、庄十郎等があつまっていた。

「もうご危篤じゃそうな。さっそく、後のお支度にかかられたがよかろう」

落着いた調子でそう言いおわると、玄白はこれからのちの恐ろしい芝居を最後まで演じ得る自信ができた。

六日。玄白は浜町の自宅へかえりつくと、急に落着きをうしなった。そうかといって、牢内をしばしば見舞うことは、お上に対してご遠慮申しあげなければならない。彼は切開部にたまる血膿の量と色とを見とどけるため、何とか口実を設けて、その日のうちに再度牢をおとずれた。手術の効果はいささかもあらわれず、源内の顔には死相が漂うていた。玄白は、永年の経験によって死相の特徴の一つと

して鼻梁が鋭くなり、こめかみの皮膚が土気色になることを知っていたが、すでにその不吉な徴候があらわれていた。彼は源内の額をなで、乱れた総髪をかきあげてやった。弱弱しく眠りつづけている源内の下顎部には、ときどき強い痙攣が襲うようにも思われた。脈は乱れて結滞をしめし、呼吸のたびに咽喉が鳴り、病状は死の一歩手前をたどっていた。

七日、八日、九日……十二日まで、源内の生命は死と生との紙一重の間にかろうじて踏みとどまっていたが、玄白は、源内の身体のどこかに潜む根強い生命力を感じて、やや愁眉をひらいた。

十三日も午前中は同じ容体がつづいた。未の刻すぎから、脚部の浮腫が少しは減り、血色がでたように思えないこともなかったが、しかしそれは玄白の眼の迷いかも知れず、或はまた物置に積み重ねられた棺桶の隙間からもれる日射しの加減によるものかも知れなかった。玄白は、それが病人のために決してよくないことは十分承知しながら、しばしば切開部の晒木綿をとりのぞいて、患部をながめた。膿汁が減じたように思われる。彼は、牢番を助手として再度の刺絡をこころみ、オランダ渡りの、貴重なペレシピタートを塗布した。

十四日。巳の刻から再び悪化の徴候があらわれた。病人の時々刻々の症状に応じて玄白の健康状態も動揺しているように思われる。十五、十六日とわずかずつではあるが、恢復の兆をしめし、水薬を少し受けつけ、脚部の浮腫はいちじるしく減じ、呼吸も脈も幾分かは平調に復しつつあった。かくまで重態の、しかも数日にわたって意識をうしなっている源内が、あれほどの手術にたえ、いま、わずかながらも恢復しつつあることに就いては、この病人のどこかに「生きようとする意志」が、かすかに動いているのではなかろうか、と玄白には考えられるのである。年来の友人、平賀源内という一個人よりも、むしろ指先きでもみつぶせそうな、「生きようとする、かすかなる意志」とでもいうべきものが、一層いじらしく思われた。

「昨夜、大牢で死人があったそうじゃのう」

「大牢に一人、百姓牢に二人、女牢で一人」

もう一つの一そう低い声がささやいた。

「大牢の男の年齢は？」

「四十二歳」

「百姓牢は？」

「五十歳と三十二歳」

百姓牢で死んだ、五十歳の男を塩漬けにし、その棺の片

隅に小さくイと印をつけることに相談がきまった。
「次にこの死骸の方じゃが……」
玄白は、源内の額をなでながら、そういった。
「やはり、駄目でしたか」
牢番にしてみれば、おなじ罪人とはいいながら、この養生部屋に移されてからは、自分が特に選ばれて、十日あまりも看護をした罪人であり、救おうと思えばこそ、あの手術をも手伝ったのである。牢番は、重湯を木匙であたえるとき、瀕死の源内がそれを吸おうとして唇を尖らすのを見て、最初は「こやつ未練な！」と蔑みもしたが、こうして特に選ばれて、ながく看護をしているうちに、源内を別の気持で見直すようになり、一匙の重湯も余計に吸わせたくなっていた。
「十中八九は絶望、万が一助かっても、二度と世間に顔出しできぬ生身の死骸ではないか」
玄白の大きな口は、いつのまにか、ひきつったような形になっていた。彼らはこの死骸の棺にロと印をつけ、イの棺は特に厳重に釘づけして、馬喰町の平賀源内宅へ送り、ロの棺は形ばかりの釘づけとし、浜町の杉田玄白宅へとどけることにした。
「拙者はイの方におともいたそう」
「ご承知のごとく、牢死ものの死骸は、おさげ渡しにならぬ定法ゆえ、門を出ることが面倒至極かと存じまする」
「不浄門からでるとして、そこを二人で決行いたそうではないか。まかり間違えば、腹を切るまでのことだ。が、拙者は坊主ゆえ、切腹はご遠慮いたそう。商売がら、自分で自分を盛りころすまでじゃ」
すべての計画ができあがると、玄白は少しは気持に余裕もできて、平生の闊達な性質にもどり、こんな冗談さえいうようになっていた。しかし、わずかの手違いから、秘密がもれて「頼んだ人」に万が一ご迷惑を煩わすようなことなれば、それは玄白の責任感からすれば、切腹ぐらいではすまされそうにもなかったので、この棺を運びだす非人の人選も疎略にはできなかった。
玄白はこのような相談をしながらも、しばしば源内の脈に触れてみた。
「イは厳重な釘づけ。ロは釘なし、か」
牢番は口の中で繰りかえした。
「頼んだぞ。玄白の頼みと思わないで、或るかたのお頼みとして」
「もとより承知いたしております」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com